隠岐国駅鈴と光格天皇 ―歴史の転換をもたらしたモノ―

伊藤 純

要旨 光格天皇は、天明六年（一七八六）に隠岐国駅鈴を実見した。駅鈴は古代律令制下で、天皇が日本各地を支配するためのモノであった。駅鈴の存在を知った光格天皇は、日本国の歴史が古代から連綿と続いているのを認識した。

天明八年（一七八八）に御所が焼失した。三年後、御所は古代王朝風の姿に再建され、寛政二年（一七九〇）一一月二二日に新御所への遷幸が行われた。朝廷の存在と権威を市中に知らしめるため、遷幸行列は古代王朝風の姿で行われた。この行列に隠岐国駅鈴が加わった。

今日、光格天皇は復古的と評され、討幕、明治維新へという流れの出発点となったとされる。光格天皇が幕末史で画期となったのは、歴史の必然、時代の要請というような言葉で説明できるものではない。

光格天皇の世界観、歴史観、国家観に決定的な影響を与えたのは、古代と光格天皇の時代を結びつけた隠岐国の駅鈴だったのである。

一 御所脱出

天明八年（一七八八）正月三〇日

暁、建仁寺前椽辻子より失火。洛中、大火と為る。仍って鳳輦に御して南門を出でさせられ、難を賀茂御祖社に避け給ひ、更に聖護院宮に行幸あらせらる。暫く此所を仮皇居と為す。内侍所も亦渡御あらせらる。丑刻（午前二時頃）許、内裏・仙洞等炎上す。（『光格天皇実録』）

『金谷上人行状記』（平凡社東洋文庫 三八頁）には、火元は「洛東建仁寺町」とあり、さらに「これは前代未聞の大火で、禁裏、院、中宮、門跡を初めとし、洛中洛外残るところもなく焼けた」（同三九頁）と記されている。この大火により、光格天皇は下賀茂神社に脱出、避難した。その後、聖護院に向い、ここを仮御所とする。次の日の丑刻（午前2時頃）には内裏、仙洞御所にも火の手が延び炎上した。

江戸時代の天皇は公式的には一歩も御所の外に出ることができず、「籠の鳥」状態であった。言葉悪く言えば「飼い殺し」のようであった。火災に見舞われての非常事態とはいえ、光格天皇が御所から出て、外の空気に触れたことは、我々庶民からは想像のできない画期的な事件であったとい

えよう。

朝廷の心臓部とも言うべき御所が、市中の大火に巻き込まれて焼失してしまった。急ぎ御所を修築しなければならない。かつての古代王朝時代のような姿の御所に修築せよとするのが朝廷の立場である。御所の修築にあたって、幕府側の代表は松平定信。朝廷は前権大納言中山愛親（なるちか）、同広橋伊光（これみつ）、権中納言観修寺経逸（かじゅうじつねはや）を造内裏御用懸に命じ事にあたらせた。

二　市中を進む遷幸行列

朝廷と幕府、紆余曲折の交渉を重ね、三年の後、新しい御所が完成した。仮御所としていた聖護院から新御所への遷幸が行われたのは寛政二年（一七九〇）一一月二二日のこと。

この遷幸行列を描いた屏風絵がある。お雇い教師として明治一一年（一八七八）に来日したアーネスト・フェノロサ（一八五三～一九〇八）が日本で収集し、アメリカのボストン美術館に所蔵される「行幸図」である。まさにこの時の、寛政二年の新御所への遷幸の様子を描いたものである（奈良県立美術館編『ボストン美術館秘蔵フェノロサ・コレクション屏風絵名品展』一九九一年）。三條大橋と思しき橋上には、光格天皇が乗る鳳輦が歩みを進めている。図録の写真で数えてみると、鳳輦の下に肩を入れている者、四六名ないし四七名。静々と新御所へ向かう様子が見て取れる。この屏風絵からは、寛政二年の新御所への遷幸行列の様子は、どう見ても丁髷と二本差しが跋扈（ばっこ）する江戸時代の風景ではない。古代の朝廷儀式、斯く有りなんと思えてくる光景である。

寛政二年一一月二二日の遷幸を『光格天皇実録』は次のように記す。

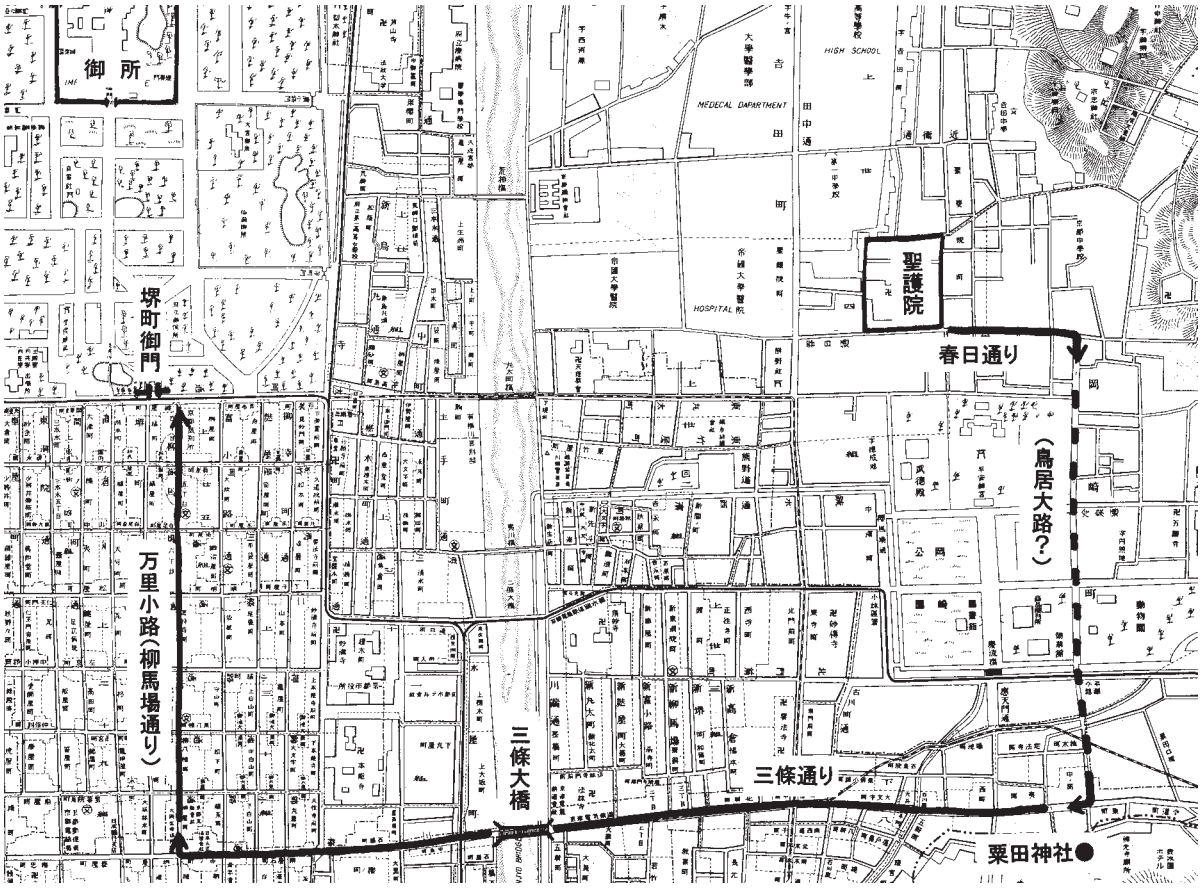
聖護院仮皇居ヨリ新造内裏ニ徙ラセ給フ、内侍所モ同ジク渡御アラセラル、是夜、内侍所ニ親謁シ給フ、

あまりに簡潔な書きようであるが、『光格天皇実録』が典拠としている史料からは、もう少し具体的な遷幸の様子が読み取れる。

「御湯殿日記」によると、新御所への遷幸の行列は、卯半刻（午前六時頃）前に聖護院の「清涼殿代にて御ふく」、辰刻（午前八時頃）前に仮御所を「出御」し、未半刻（午後二時頃）「清涼殿へ入御、御機嫌よくめで度御賑〳〵也」とある。午前八時頃に出発した行列は、五・六時間かけて新御所に到着したのである。

「柳原均光日次記」には当日の天気について「陰晴不定、時々雨下」とあり、晴れたり曇ったりで、時々雨も降ったという。天皇の大行列が市中を通過するにはやや気の毒な天候だった。

また、「柳原均光日次記」には一行の仮御所であった聖護院から新御所への道順も記されている。光格天皇の一行は、聖護院の右衛門の陣より出発し、春日小路を御所とは反対方向の東へ進み、鳥居大路に出ると南（右）に折れ、三條大路に行きつくと西（右）へと向きをかえ、三條大橋を渡り、万里小路（現・柳馬場通）までくると、ここで北（右）に折れ、美福門代（現・堺町御門か）を経て、建礼門、承明門から新御所に入ったとある。聖護院の南側を東西に走る丸太町通を西に進めば、御所の南門・堺町御門までは二km弱である。聖護院から新御所への行列は最短の道筋をとらず、一旦は御所とは反対方向の東へ向い、右折れ、右折れを繰り返して市中をグルリ。現在の道でたどってみると、行列の行程は六km程となる。最短距



「柳原均光日次記」による遷幸の道順

離の移動に比べ三倍以上の大廻りの道順である。このような道順をとったのは、「行幸図」に描かれたような、豪華で長蛇につくった行列を見せびらかし、「強大な」朝廷の存在を市中に知らしめるためだったのだろう。

三　本居宣長が見た遷幸行列

先に紹介した「行幸図」に描かれた遷幸行列を実際に生の目で見、眼前を通過する行列を記録していた人物がいた。かの本居宣長（一七三〇～一八〇一）である。「寛政二年庚戌日記」（『本居宣長全集』一六巻　筑摩書房　一九七四年）には

十一月
廿二　御迂幸拝見

とある。この時宣長、満六〇歳。たまたま京都に滞在していた宣長が、偶然に遷幸行列に出くわしたのではない。宣長が松阪を発ったのは一一月一四日。この日は関宿に泊まり、翌一五日は石部泊。京都に入ったのは一六日のこと。遷幸の日、二二日までの間は三條大橋東の伊賀屋源太郎なる家に逗留した（『本居宣長全集』一六巻）。宣長の遷幸行列に立ち会いたいという気持ちは『鈴屋集』七の「橘経亮（つねあきら）に答へたる書」の一節で述べられている。

新宮（にいみや）めでたくつくり出られて、御うつろひの大御ゆきのおはしますべければ、そのをりは、かならずのぼり侍りて、いともかしこく、めづ

らかなる大御よそひをも、みつばよつばの大殿づくりをも、をがみ見奉らまほしく、かつは君にも見え奉らむと、今よりなむおもひたゝれ侍るを、それはた来む年のうちなどには、いまだしくや侍らんと、いとまちどほなるこゝちのし侍れば、なほ君が伊勢路の旅衣をこそ、かへすかへすもまち奉れ、

とある（『本居宣長全集』一五巻　筑摩書房　一九六九年）。新御所竣工後に行われるはずの遷幸を「をがみ見奉らまほし」と、大そう心待ちにしている気持が表れている。

遷幸の日が一一月二二日に決したのは、その月の四日のことであった。寛政二年一一月四日の記述には

新造内裏遷幸、内侍所渡御、被立御帳台並に御装束始、被置版位等の日時定を行はる。

とある（『光格天皇実録』）。この日に新御所への遷幸が一一月二二日と決まったのは間違いない。当時の儀式伝奏勧修寺経逸の記録『新造内裏遷幸伝奏事』（内閣文庫）によれば、寛政二年一一月二日の記述に、

一　陰陽頭清書日時
　　択申可被遷幸于新造内裏日時
　　今月廿二日戊戌時辰

とあり、宮中内で遷幸日が一一月二二日と決まったのは一一月二であることが判明する。

一一月四日以降に遷幸日一一月二二日の情報が広く広報されたのであろう。遷幸日の情報を得た宣長は、京都に向け、一一月一四日に松阪を発ったのである。遷幸日の情報だけでなく、遷幸行列の道順や、行列の順番、今日言うところの式次第、「遷幸行列案内」のようなものが事前に配布されていたと思えるのである。それは、遷幸行列を見物した宣長の記録があまりに詳細であり、眼前を通過していく行列を見ながら書きつけたメモ書きとはとうてい思えない内容なのである。

本居宣長記念館にはいくつかの寛政二年の遷幸行列の記録「御遷幸行列」、「御行列」、「寛政二年御遷幸御行列」が残されている。このうち「寛政二年御遷幸御行列」は現場で宣長がとったメモ書きを清書したものと思われる。表紙には墨書の丁寧な文字で

寛政二年
　　御遷幸御行列
　　十一月廿二日

とある。「十一月廿二日」の下には朱筆で

辰剋　　伝奏　勧修寺大納言正二位藤原経逸卿　四十三
　　奉行　清閑寺蔵人改左中弁正四位上昶定朝臣　廿九
　　御家領百八十石　勧修寺家藤原氏ナリ

とある。本文も丁寧な文字で記されている。他の二書が現場で急ぎ記した

と思われる崩れた文字であるのと比べ、大きく異なっている。さらに、行列で団を構成する名称には朱筆で四角に囲んでおり、他書にはない書き込みである。

先に見た「御湯殿日記」によれば、遷幸の行列は辰刻（午前八時頃）前に聖護院を出発したと記されているので、辰刻（午前八時頃）から行列を見ている宣長は、行列が出発する聖護院の近辺に陣取り、眼前を通過する行列の一部始終を見物したのであろう。

宣長の「寛政二年御遷幸御行列」では、朱で囲った箇所が四四ある。それに番号を付して順に並べてみると次のようになる。

1右京職・左京職—2神祇官—3弾正台—4兵部省—5民部省—6治部省—7式部省—8宦史—9隼人司—10左衛門府—11左兵衛府—12陰陽寮—13中務省—14内舎人—15右馬寮・左馬寮—16内記局—17近衛代—18主鈴—19右近衛府・左近衛府—20近衛代・近衛代—21府生・府生—22将曹・将曹—23将監・将監—（鳳輦＝光格天皇）—24執翳・執翳—25職事—26主殿寮—27掃部寮—28右兵衛府—29大舎人寮—30図書寮—31内蔵寮—32内匠寮—33大蔵省—34宮内省—35典薬寮—36内膳司—37主水司—38大膳職—39大炊寮—40造酒司—41木工寮—42兵庫寮—43雅楽寮—44右衛門府

一見すると全て古代律令制以来の、朝廷を構成する官職の名称であるが、一つだけ官職名とは異なるものがある。それは一八番目の「主鈴」である。宣長は

主鈴　珍之朝臣

と記す。一八番目となる主鈴について、朝廷に仕える珍しいもの、といった意味か。『光格天皇実録』寛政二年一一月二二日条が引く「柳原均光日次記」にもほぼ同じ行列が記されている。先導者の次から朝廷を構成する官職が続き、一番目は京職、二番目は神祇官、三番目は弾正台と続く。やはり一八番目に相当するところには

主鈴　珍之朝臣（舎人一人 雑色二人）

とある。「主鈴　珍之朝臣」は宣長の記述と同じである。

宮中内で隠岐国の駅鈴が遷幸行列に加わることが決まったのは先の『新造内裏遷幸伝奏事』によれば寛政二年九月一七日のことである。

やはり先に推定したように、当日の遷幸行列について、順番と構成を記した式次第が事前に配布されていたのは間違いない。

行列の一八番目となった主鈴は、隠岐国に古来より伝わってきた（とされる）駅鈴である。朝廷の新御所への遷幸という大イベントに、なぜ隠岐国の駅鈴というモノが加わることになったのだろうか。

四　駅鈴京都に出現

島根県の離島、日本海に浮かぶ道後に鎮座する玉若酢命神社（たまわかすみことじんじゃ）。ここの神職隠岐国造家（億岐家）に古代律令制以来伝わってきたとされるのが、遷幸行列に加わった駅鈴である。

隠岐国の駅鈴の存在が朝廷にまで知られ、寛政二年の新御所への遷幸行列に加わることとなった経緯を見ておきたい。

隠岐国駅鈴（玉若酢命神社所蔵）

同時代の記録として並河一敬『駅鈴記』という書物がある。また、島根県立図書館には、億岐家に所蔵されていた文書を大正五年（一九一六）に島根県史編纂掛が写したものが架蔵されている。さらに、億岐家蔵の史料をもとにした億岐豊伸『隠岐国駅鈴・倉印の由来』（一九六九年）がある。やや長くはなるが、史料紹介を兼ねて三書の必要部分を引いてみる。

並河一敬『駅鈴記』

隠岐国造某者、嘗来於京師、遊于望楠軒西依先生之門、一日以其家累世所蔵駅鈴一口、供先生之観、予偶在側、而得寓目焉、熟惟是器、古昔
天朝典制之物、而其制已断久矣、以故世識之者稀也、予有何幸而得観之乎、乃模其形、以献之広幡内府前豊公、公博雅好古、悦而珍之、遂以聞近衛准后殿下、殿下亦珍之、且欣其制久失而僅存、欲鋳造之伝於後来焉、是以内府公命一敬、選工鋳之、併撰典故、一敬恭以奉教、爾後刀圭之余、披覧之序、聊集概見于古書数件、報台教之重、且供同好之徴考云、

島根県立図書館蔵億岐家史料

駅鈴　国造幸生筆記云

吾総社神廟所蔵鈴二枚、大二寸許、重壱斤余鋳成、駅鈴二字於左右、其図象模載別幅、世伝以為神物、蓋三部国史国造本紀等歴々所出者是也矣、天明五年巳初冬、余以叙位之事留在京師、有故挈鈴来、其明年夏六月前大納言藤資枝卿（日野）請視之、余乃上之大奇而遂入于中、以備叡覧未幾投還焉、卿且作和歌一首賜之、余拝其辱此叙位事畢、并

帯而帰国矣、偶天明八年戊申春京師大火、延及宮省殿門於此六龍蒼皇、幸聖護院遂御法親王之宮公卿諸司尽占刹居民之宅以便行在所矣、既勅百司命大匠鳩四方之工率子来之民経営凡三年新宮再造矣、尋詔公卿議還幸之儀令有司各上故事、同年夏六月従二位卜君（神祇大副）差藤殿下（鷹司関白）之台命召臣（幸生）令急赴京都即日致鈴於卜二位君許蓋聞天子之幸也、文章威儀度物悉備矣、鈴亦以為軌物也、即以備矣、既公卿定議陰陽寮卜上告辰以同年冬十有一月廿有二日還幸新宮于斯時也、主上乃御大鳳輦備法駕師群臣副車鸞旗鹵簿欣飛星陳天行周行遵皇閣清晨発行在入御新宮、於是無卒無裔山呼萬歳莫不抃舞嘔吟也、明年辛亥春三月下賜鈴又併黄金一枚唐櫃一事、…

億岐豊伸『隠岐国駅鈴・倉印の由来』（一九六九年）

光格天皇駅鈴を御覧給う

天明五年（一七八五）隠岐国造幸生が自家伝来の駅鈴を帯同して上京したのが、世間に知られる端緒である。翌天明六年の夏、その師として仰いだ界町二条の西依潭明（号成斎）並びに好古家並河一敬に之を示し、研究調査を依頼した処、両者共に深く嘆賞し、更に一敬は自ら駅鈴を模写し、その珍宝である事を附して、広幡内府、近衛准后の御覧に入れ、遂には此の両御方により光格天皇の天覧にまで供し奉った。その後一敬は広幡内府の命により後世に伝える為「駅鈴記」一巻を編著し、又鋳金家に命じて模鋳駅鈴十五口を製作し、近衛准后はじめ、広幡前内大臣、萩原刑部郷・花山院大納言・平松平時郷等それ〴〵の知名氏に頒たれた記録があるが、果して現存するか否かは不明である。

光格天皇御下賜唐櫃（鈴櫃）

天明八年（一七八八）京都の街が大火に災いされ、御所（土御門殿）も御延焼した。

天皇は聖護院を仮御所と定められ遷御なされたが、三年後の寛政二年十一月二十日新営の皇居に御還り遊される時、古式に倣って鈴櫃を行列の中に御加えに成る事になった。

朱塗の鈴櫃は新しく調製になり、中に納める駅鈴は先年国造幸生が天覧に供し奉ったこの隠岐国駅鈴を用いさせられる旨の勅定を畏み、幸生は再度帯同して上京し謹んで御下命に供し奉った。

御儀式の終了後、駅鈴返戻に当り御調度の鈴櫃に大判一枚を添えて盛儀の記念品として御下賜あらせられた。

読みづらい部分もあるが、この三つの記述から、駅鈴の「出現」、認知、そして寛政二年の遷幸行列への参加を、時間軸に添って整理してみたい。

天明五年（一七八五）初冬

隠岐国造幸生（さとなり）が駅鈴を帯同し京都へ上った。

天明六年（一七八六）六月

漢学者の西依成斎（にしよりせいさい）（一七〇二～一七九七）や、好古家の並河一敬に幸生は駅鈴を示した。並河一敬は駅鈴をスケッチした。さらに、日野資枝（ひのすけき）（一七三七～一八〇一）、広幡前豊（ひろはたさきとよ）（一七四二～一七八三）、近衛維子（このえこれこ）（一七六〇～一七八三）等のトップクラスの公家も駅鈴を見た。

天明六年（一七八六）六月以降

広幡前豊、近衛維子の仲立ちによって、光格天皇もこの駅鈴を見るところとなった。

隠岐国造幸生に対する叙位が終了し、隠岐に帰る。広幡前豊の命によっ

て並河一敬が『駅鈴記』を著わす。

天明八年（一七八八）正月三〇日

京都市の大火によって光格天皇は御所から避難し、聖護院を仮御所とした。

寛政二年（一七九〇）六月

鷹司輔平（一七三九～一八一三）が隠岐国造幸生に対して急ぎ上京せよとの台命を伝える。

隠岐家には六月三日付の書状がある。鈴鹿土佐守・鈴鹿近江守、鈴鹿筑後守から隠岐国造幸生に対して、駅鈴もって上京せよとの内容。

寛政二年（一七九〇）一一月二二日

新御所への遷幸行列に　隠岐国駅鈴（主鈴）が加わる。

寛政三年（一七九一）三月

隠岐国造に対して、黄金一枚と駅鈴を収納する唐櫃が下賜される。

天明五年（一七八五）に隠岐国造幸生が駅鈴を持って京都へ上った。次の年、西依成斎をはじめとする知識人が駅鈴を見ることとなった。駅鈴の情報はトップクラスの公家にも伝わり、彼らも実見した。実見した公家を介して光格天皇にも駅鈴の情報が伝わり、天皇自身も実見するところとなった。その後、天明八年（一七八八）に京都は大火に見舞われ、光格天皇は御所から避難、聖護院を仮御所とした。三年後の寛政二年（一七九〇）一一月二二日、新御所への遷幸が行われ、この行列に隠岐国駅鈴が加わった。

以上が駅鈴の出現から、遷幸行列に駅鈴が加わった時間的流れである。

五　光格天皇登場

新御所への遷幸行列で、自身の乗る鳳輦の先導に隠岐国の駅鈴を加えた一一九代光格天皇（一七七一～一八四〇　在位一七七九～一八一七）は、特異な経緯で位についた天皇である。

113東山―114中御門―115桜町―117後桜町
　　└116桃園―118後桃園
└閑院宮直仁―閑院宮典仁―119光格―120仁孝―121孝明―122明治―123大正

系譜を見て分かるように、一一九代光格天皇は、一一八代後桃園天皇とは直接的な親子関係や兄弟関係はない。後桃園天皇から数えると、四世代前の一一三代東山天皇から分かれた傍系の閑院宮家の生まれである。

一一八代後桃園天皇（一七五八～一七七九）は、明和七年（一七七〇）に天皇位についたが、安永八年（一七七九）一〇月二九日、満二一歳で急逝してしまう。後桃園天皇には男子がいなかったため、後継が決まるまで後桃園天皇の死は伏せられた。閑院宮典仁親王の第六子、満八歳の祐宮（後に光格天皇）が急遽後桃園天皇の養子となり、安永八年一一月二五日践祚する。

このように光格天皇が天皇位についた事情は複雑であった。一一三代東山天皇から一一八代後桃園天皇までは直系であったが、一一九代光格天皇は東山天皇の第六子直仁親王の時、宝永七年（一七一〇）に創設された傍系の閑院宮家出身で、直系の天皇家から分かれて六九年、しかも満八歳の祐宮（光格天皇）が後桃園天皇の養子となり、天皇位を継いだ。

天明六年（一七八六）、光格天皇が駅鈴を実見した時に仲立ちの一人となったのは近衛維子（一七六〇～一七八三）。彼女は明和五年（一七六八）に後の後桃園天皇と結婚するが、男子の誕生がないままに後桃園天皇が没してしまったので、満八歳の祐宮（後の光格天皇）を自身の養子として天皇位を継がせた人物である。

息子となった光格天皇に、駅鈴の情報を伝えた天明六年（一七八六）は、母維子満二六歳、光格天皇満一五歳であった。

六　復古をめざした光格天皇

特異な状況の下で天皇位についた光格天皇が成した事蹟について、今日の評価を見ておきたい。

武部敏夫は、

天皇は質性円満、質素を尚び修飾を好まず、ことに仁愛を旨としたので、諸臣はひとしく敬慕して奉仕したと伝えられる。…（中略）…また旧儀の復興に意をとどめ、在位の間に石清水社・賀茂社の臨時祭の再興を見るに至った（『国史大辞典』五巻　吉川弘文館　一九八五年）。

と光格天皇を評する。

藤田覚は、

学問好きの天皇だったらしく、天明八（一七八八）年十月に、後桜町院は、天皇が学問好きなのを称揚し、公家たちも天皇を見習って熱心に学問するようにと勧奨しているほどである。さきの『小夜聞書』にも、「殊に御学文を好ませ給い、わが国に歌道、また有職の道に御心をつくさせ給い」と書かれている。世間にも知られた好学の天皇であった。

と述べる（『幕末の天皇』講談社学術文庫　五六頁）。

また藤田は、

光格天皇は正直に言って、よく分らない人物である。光格天皇は前天皇（後桃園天皇）の子供ではなかった。閑院宮家という新井白石の意見によって創られた新しい宮家から出て、安永八（一七七九）年に養子となって天皇を継いだ、いわば傍系である。それ故に、どうしても幕府から軽く見られるところがあったようである。そこで女性の先々代の天皇、後桜町院が心配し、一所懸命学問をするよう指導した。そのため光格天皇は学問をよくし、若い公家を集めては四書五経や儒学の勉強会を開いた。こういった事情もあり、光格天皇は、天皇はこうあるべきだ、という理念を強くもつようになった。

とも評している（『近世天皇論』清文堂出版社　一四八頁）。

傍系の家柄から天皇の養子となったかたちをとり、天皇位についた光格天皇には、歴史を背負う帝王としての英才教育がなされた。

盛田帝子は、幼少の光格天皇に対する教育について

天明元年（一七八一）一月十日、元服を終えた光格天皇は後桜町院に自ら詠んだ和歌を提出し教えを仰いだ。このとき十一歳。即位後はじめての「御代始」と呼ばれる禁中における和歌御会始を二週間後（二十四日）に控えていた。歴代の天皇がそうして歌の力をつけていったように、光格天皇も、新たに作品を詠出するごとに後桜町院に添削を受け、修練を積んだ。…（中略）…後桜町院に和歌の指導を受けながら、内裏ではさらに、光格天皇の和歌を鍛錬するための特別な歌会が始まった。

と、光格天皇に対する帝王教育の実態を明らかにしている（『近世雅文壇の研究』汲古書院　二〇一三年　五四頁）。

そして、

天明・寛政期に光格天皇が目指した古き良き時代への精神は、京都市中にもゆきわたり、街には復古的気分がかもしだされていた。

と、光格天皇が発する空気が街に流れ出していることを述べる（『近世雅文壇の研究』五九頁）。

それでは光格天皇が成した復古的と思われる事蹟を年譜的に確認しておきたい。

安永一〇年（一七八一）正月三〇日（『光格天皇実録』）
「大日本国大王」を自称。
天明六年（一七八六）　満一五歳
光格天皇、隠岐国駅鈴を見る。
天明六年（一七八六）一一月一日　冬至
一四四九年以来途絶えていた「朔旦冬至の旬」を再興。
天明六年（一七八六）一一月二一日
一七七八年以来中断していた新嘗祭を再興。
天明七年（一七八七）一一月二七日
大嘗祭挙行。大嘗祭は戦国時代を通じて行われず一六八七年に再興されたが、「貞享以来の形よろしからず、貞観・延喜などの式のごとく作進しかるべき」古代の形にせよと言う。
天明八年（一七八八）正月三〇日　満一七歳
御所、京都の大火で焼失。聖護院を仮御所とする。
天明八年（一七八八）四月四日
朝廷側の意見として、御所を復古的に造営することが光格天皇、関白鷹司輔平（すけひら）、左大臣一条輝良のレベルで合意される。
天明八年（一七八八）一一月頃
朝廷が作製した図面どおりに御所を再建することが決定された。
寛政二年（一七九〇）一一月二二日　満一九歳
新御所完成。還幸行列に隠岐国駅鈴加わる。
寛政二年（一七九〇）一二月二一日
「新宮（所）の旬」（新御所を祝う宴会）が再興される。
寛政三年（一七九一）
幕府に相談することなく、新嘗祭を行う神殿・神嘉殿が御所内に再興される。
寛政三年（一七九一）一〇月

内裏に火災その他の災厄が降りかからないようにと祈る大殿祭（おおとがい）を再興。
寛政三年（一七九一）一一月
新造された神嘉殿に行幸して新嘗祭を親祭。
享和元年（一八〇一）三月
伊勢神宮へ臨時奉幣使として公卿を派遣。辛酉年の公卿勅使派遣は一二六一年を最後に中断していた。
文化五年（一八〇八）
太政官印（外印）が再興される。
文化一〇年（一八一三）三月一五日
一四三二年以来中断していた石清水八幡の臨時祭祀を再興。
文化一一年（一八一四）一一月
応仁の乱（一四六七～）頃から中断していた賀茂社の臨時祭祀を再興。
文化一四年（一八一七）三月二二日　満四六歳
子の恵仁親王（のちの仁孝天皇）に譲位し、上皇となる。
天保八年（一八三七）頃
『日本書紀』講読会を始める。
天保一〇年（一八三九）一一月一三日
『続日本紀』講読会。天保一三年末に終了。『日本後紀』講読会に続く。
天保一一年（一八四〇）一一月一九日
満六九歳にて没す。

このように見ると、光格天皇は諸氏の評するとおり、古代律令制の朝廷の姿を再現・再興しようとした人物であることは、誰が見ても明らかである。

七　歴史の流れを変えたモノ

古代律令制への復古をめざした光格天皇。何が彼をそのような方向に向わせたのだろうか。

傍系の家の生まれながら、突然の事情によって、満八歳の身で天皇位につかされた光格天皇。周囲は皇統を背負う第一一九代の帝王に育てるべく幼少の時から帝王教育を行った。先に述べた和歌の教育だけではなかっただろう。当然のことながら『日本書紀』『続日本紀』を始めとする正史を通じての歴史教育があったことは間違いない。

帝王学が注入されながらの光格天皇が、満一五歳の年、天明六年（一七八六）に隠岐国の駅鈴に遭遇したことが彼の人生観、世界観、日本国の統治者として日本国のあるべき形について決定的な影響を与えたのであろう。自らが頂点に立つ、立たなくてはならない日本国に、古代天皇制の駅鈴が、実在のモノとして存在していることを光格天皇は知った。駅鈴は天皇が日本全域を支配するために、天皇と各国を結びつけたモノであった。帝王としての教育を受けている最中に、光格天皇は駅鈴という古代天皇制と直結するモノに遭遇したのである。自らが頂点に立つ日本国の歴史が、途絶えることなく連綿と続いていることを強烈に認識、自覚したに違いない。

天明六年に駅鈴の存在を知った後、不幸にして二年後の天明八年に御所が焼失しまう。新たに成った御所は、朝廷側の強い意見により、古代王朝風の姿に復元された。ここへの遷幸は、古代以来の朝廷が現存し、しかも朝廷が現実に機能していることを市中に知らしめるための大イベントとして行われた。古代以来の朝廷が今日まで連続していることを実証する唯一

の物証が隠岐国の駅鈴であった。古代を再現・再興するために、光格天皇は自らの先導として駅鈴を行列に加えたのである。

古代から連続している歴史を自覚した光格天皇は、中断していたいくつもの儀式を復活させた。満四六歳で退位した後も、『日本書紀』『続日本紀』の講読会を行ったりもした。

復古的と評される光格天皇。その後の討幕、明治維新という歴史の流れの出発点となったのは光格天皇、という見方は大方の認めるところである。光格天皇がこのような大きな転換をもたらしたのは、歴史の必然とか、時代の要請とかいうような抽象的な言葉で説明できるものではない。

光格天皇の世界観、歴史観、国家観に決定的な影響を与えたのは、手のひらに乗る小さな鈴、隠岐国の駅鈴だったのである。

〈参考文献〉発行年順
『光格天皇実録』ゆまに書房
『新造内裏遷幸伝奏事』内閣文庫
並河一敬『駅鈴記』天明年間（一七八一～一七八八年）
松平定信「宇下人言」岩波文庫
『栗里先生雑著』巻三　一九〇一年
瀧川政次郎「駅鈴伝符考」『出雲・隠岐』平凡社　一九六三年
億岐豊伸『隠岐国駅鈴・倉印の由来』一九六九年
黒川真道「駅路鈴の説」『考古学会雑誌』二編八号　一八九八年
樋畑雪湖『日本駅鈴論』国際交通文化協会　一九三九年
中村幸彦「小篠敏伝攷」『中村幸彦著述集』一二巻　中央公論社　一九八三年
藤田覚『幕末の天皇』講談社　一九九四年
野々村安浩「古代山陰道」『古代出雲文化展』朝日新聞社　一九九七年
久保貴子『近世の朝廷運営―朝幕関係の展開―』岩田書院　一九九八年
岸本三次『西依成斎基礎資料集』岩田書院　二〇〇五年
藤田覚『近世天皇論―近世天皇研究の意義と課題』清文堂出版社　二〇一一年
盛田帝子『近世雅文壇の研究―光格天皇と賀茂季鷹を中心に―』汲古書院　二〇一三年
森田喜久男「隠岐に残る駅鈴」『日本古代の交通・交流　情報1』吉川弘文館　二〇一六年

A Consideration of the influence of Oki Province *Ekirei* bells on Emperor Kokaku

ITO Jun

In 1786 Emperor Kokaku (1771-1840) observed 7th century *ekirei* bells which had been handed down and preserved in Oki Province (Islands). Ekirei (lit, station bell) is a bell provided by the Imperial Court to government officials who traveled on official business under the *ritsuryo*system of ancient Japan, and worked as a symbol to virtually connect the Emperors and the provinces.This lead to Kokaku'srealization that Japan had a longand continuous history that stretched from 7th century.

In 1788 his Imperial palace in Kyoto was burned down andthe new palace was built in the ancient style.A ceremony was held on the 22nd of November, 1790, to mark the move to the new palace and the procession was carried out in an ancient style, along with the use of Oki *ekireis* during the ceremony.

Today, it is understood that Emperor Kokaku fostered restorationism, and founded the movement to return Japan to society ruled by the Imperial court and the Emperor rather than the shogunate. However, the change can (and should) not be simply explained as one of "inevitabilities of history" nor a "necessity of the time".

It was Oki *Ekirei*, connecting ancient times to that of the Emperor Kokaku, which changed his mindset and view of the world, history and state.